

ニーグレンのアガペー思想から 「《尊びの愛》としてのアガペー」論へ

遠藤 徹

筆者は、長年に亘って、但し一時の中断を挟みながら、ニーグレンのアガペー思想を考察して来たが、その一方で、中断時に、「《尊びの愛》としてのアガペー」という視点の閃きを得て、その考察をも推し進めて来た。即ち、「アガペー」というギリシア語の意味合いを追究し、それは「愛」とは言っても、「フィリア」のように「親しみ愛す」愛ではなく、また「エロース」のように「恋い慕う」愛でもなく、相手を「尊んで愛す」愛——「尊びの愛」——を言い表すのではないかとの見解に行き着き、それを著書にもした。⁽²⁾ 根本的には B.B. Warfield の語源研究に依拠しながら、聖書の諸所がこの意味合いで整合的に読める次第を明らかにしたのであった。ところで、この「《尊びの愛》としてのアガペー」の見解はニーグレンのアガペー思想に対してはどう関係するのか。ニーグレンの思想の考察を前稿でひとまず終えた今、ニーグレン批判と「《尊びの愛》としてのアガペー」論の関係ないし整合性を確認することが必要であるが、本稿が目指すものはそれである。

一、ニーグレンのアガペー思想の問題点

多岐に亘ったニーグレンのアガペー思想の考察を通して明らかになった幾つかの問題点の内、最も重要なものは何であろうか。筆者はそれを次の二点に集約することができると考える。即ち(1)最高善としての神への信仰の排除、および(二)「アガペー」からの自己愛の排除である。

(1) 最高善としての神への信仰の排除

「アガペーは動機づけられない愛である」とのニーグレンの主張は、彼のアガペー思想全体を根本で支えている最も基本的な主張である。即ち、神の愛は「善人をも悪人をも等しく愛す」愛であるところに最大の特徴を持つており、ここからアガペーは正当な理由に動機づけられることがない、不合理な、無条件的な愛であるところに最も重要な本質を持っているとされる。人間のアガペーも、神のアガペーに基礎を持ち、その特徴を共有しなければならぬから、人間の神へのアガペーも正当な理由に動機づけられない、無条件的なものでなければならぬ。即ち神が最高の善であるから神を愛すという信仰は正しいアガペー概念から外れるものである、とされるのである。

しかし、「神は善人をも悪人をも等しく愛す」(①)ことは間違いないとしても、「神は善をも、悪をも、等しく愛す」(②)と言えるのであろうか。こうは言えないということを否定する者がいるであらうか。にもかかわらず、それを見落としたところに、ニーグレンの最大の問題点があったであらう。これを見落とさなかったなら、「神

は善を愛すが、悪を愛すことはない（悪を憎む）」（③）を、①と並んで主張しなければならない。そして①と③が両立するように、次のように言わなければならないはずである。

神は善人をも悪人をも等しく愛す。（①）しかし、神は善を愛すが、悪を愛すことはない（悪を憎む）。（③）従って、神は善人を一層善へと向かうように導き愛し、悪人を善へと向きを変えるように導き愛す。その方向転換の第一歩として悪人を「悔い改め」へと導く。

神は善人をも悪人をも等しく愛すとしても、それぞれへの愛し方は異なるのである。愛し方は異なっても、どちらの場合にも共通なことは人間を善へ向かって導き愛すことである。

このことが正しければ、つまり、神の人間への愛は善へと人間を向かわせることに動機づけられている愛であるとすれば、人間の神への愛はそのような神の愛に動機づけられ、応答するような愛であり、言い換えれば、すべての人間を善へと導き愛す、最高の善である神への愛である。——こう結論づけなければならないであろう。

このことは我々の体験に即しても事実であり、正しいであろう。

神との原初的・根源的出会いの場とはどういう場かと問われるなら、絶体絶命の時、例えば病氣の子供を抱えている両親が医師から最後の覚悟を告げられたとき、或いは登山に出かけた息子の遭難を警察から知らされたときなどに、「神様！助けて下さい!!」と絶叫する場面であろう。その時に縋る「神」は、本当に絶望の淵に立っているときには、何教の神でもない場合もあるであろう。「神様！仏様！阿弥陀様！」と叫ぶ人もあると言う。

助けて下さる方なら、誰でもよいのである。そのように何教のものでもない神に出会っているときこそ、特定の宗教の衣を着せられる以前の神に最も根源的に出会っている時であろう。本来何々教の神などというものは存在

しないはずである。まことの神は特定の宗教の民のものではなく、万人のものであるはずである。

そういう原初的・根源的な神との出会いの場でも、つまりどんな内実の神か分からずに向かっているときでも、間違ひなく確かな一つのことは、神は叫び願う者にとって「最高の善なる方」であるということである。願う者を絶望の淵から救い出して下さる、全き善の（完全な仕方で恵み深い）、全能の、方である。それは人間を、万物を、善または悪へ無頓着に導く方ではなく、必ず善へと導いて下さる方、たとえ途中で一時的に悪に陥らせることがあるとしても、最終的には最善へと導かれる——そう考えられる方である。そこで求められている「善」はまだ「御利益」に過ぎなくても、まことの神はそれを斥けるのではなく、むしろ純化させて導くであろう。

こうして、最高善としての神を愛することは間違ひだと主張するニーグレンに対しては、そうでない信仰はあり得ない、と答えなければならない。

ニーグレンは、絶体絶命の中では、善とも悪とも知り得ない神を、「愛す」と言うよりは、無条件に「信じる」と言う方がふさわしいと言ったが、確かに、絶望の淵にさしかかって救いを叫び求める場面では、人は計り知れない神を「愛す」とはまだ言えず、むしろ「信じる」、信じて「賭ける」、信じて「身も心も預ける」と言う方が適切であろう。⁽⁴⁾しかし、ともかく、身を預ける神は「最高に善なる方」なのであり、願いが叶えられたときに生じるものはその「最高に善なる方」であつた神への心底からの「感謝」と全身全霊での「愛」であろう。それが不当であるなどということは、どこにも、いささかも、ない。

(2) 「アガペー」からの自己愛の排除

ニーグレンは、アガペーの第二の掟「あなたの隣人を自分のように愛しなさい」を強引にも、「あなたの隣人

を、自分を愛することを放棄して、愛しなさい」が本意であると主張した⁽⁵⁾。理由は「自己愛」は自己中心的な愛に他ならないから、それを放棄しなければ隣人を愛することはできない、ということであった。しかし「自己愛」を直ちに自己中心的な愛だと断定することには根拠はない。隣人を愛することと自分を愛することが両立する場合、例えば車いすを押して隣人を喜ばせることが自分にも有益で喜びをもたらすことでもある場合はあるであろうが、「隣人が喜べば、自分も喜び、隣人が喜ばなければ、自分も喜べない」というように、相手の喜びに自分の喜びが従属している場合には自己中心的ではなく、相手中心である。隣人への愛と自分への愛とが同等に目指される場合も自己中心的ではない。従って、第二のアガペーの掟はやはり「あなたの隣人を、自分を愛するように、愛しなさい」であってよいのであり、これによって自己中心的な自己愛を排除しているのである。

二、ニーグレンのアガペー思想への批判と「《尊びの愛》としてのアガペー」論

さて、神のアガペーは人間を善へと導く愛であることが確認されたが、これは言い換えれば「神のアガペーは人間を《尊び愛す》愛である」ということに他ならず、まさに筆者が到っている見解である。そしてこの見解は聖書の中の次のような言葉によって一層強化されるであろう。

①私の目に、あなたは高価で尊い。私はあなたを愛している。⁽⁶⁾

(イザヤ書 43・4、新改訳)

②「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

(ヨハネ3・16、新共同訳)

ここで告げられている「愛」は、間違いない、神が人間を尊い存在として、或いは尊くあるべき存在として、愛している愛だと言つてよいはずである。⁽¹⁾

一方、アガペーから自己愛を排除すべきだとのニーグレンの主張が不当であるとの見解も、アガペーを尊びの愛として捉える立場にそのままつながる。なぜなら、第二のアガペーの掟が単に「隣人を自分のように愛しなさい」ではなく、「隣人を自分のように尊び愛しなさい」であるとき、これは「隣人を自分のように好きで愛しなさい」と異なつて、自己中心性を根本から排除するはずだからである。「隣人を自分のように尊び愛しなさい」は「隣人を、自分を尊び愛すように、尊び愛しなさい」であるが、隣人を尊び愛すことと共に目指される自分を尊び愛す自己愛は、隣人を好きで愛すことと共に目指される、自分を好きで愛す自己愛の自己中心性を免れてゐるはずである。

このことを一層明確にするためには、そもそも「尊ぶ」・「尊び」とはどういうことかをはっきりさせる必要がある。それは以下の通りであろう。

(1)「尊ぶ」・「尊び」との同義語を挙げるなら、「敬う」、「かしこむ」、「畏れる」、「うやうやしく仰ぐ」、「尊敬」、「尊重」、「畏敬」、「敬い」、「畏怖」、等々が挙げられるであろうが、これらは「相手の位格や品位や価

値を高く見る、また高くする」ということであろう。

(2) また、同義語とは言えないが、表裏の関係にある言葉として、「敬虔」、「謙虚」、「慎み」、「へりくだり」、「恭順」等があり、これらは「自分の位格や品位や価値を低く見る、自らを低くする」⁽⁸⁾ ことであろう。

(3) 一方これらの反対語は「威張る」、「傲慢」、「自慢」等であり、これらは「自分の位格や品位や価値を高く見せる」ことであろう。

(4) また(3)と表裏の関係にある言葉は、「バカにする」、「見下す」、「軽蔑」、「侮蔑」、「蔑視」、「蔑み」、「貶め」等であり、これは「相手の位格や品位や価値を低く見る、また低くする」ことであろう。

これらをまとめれば、「尊ぶ」とは「自らを低くしながら相手を高く見、また相手を高める」ことであると言つてよいであろう。そしてこれを踏まえれば、「自分を尊ぶ」ということは「自らを低くしながら、自らを高く見、且つ、高める」ことである。謙虚さの内に自分を高くあるべき者と見、事実高めることである。

自分を尊ぶということがこのようなことであるとき、「隣人を自分のように尊び愛しなさい」という掟を「隣人を、自分を尊び愛すことを排除して、尊び愛しなさい」に置き換える必要は全くないであろう。むしろ「謙虚さの内に、自分を高くあるべき者と見、高めるように愛しなさい。そして隣人に対しても同様に、謙虚さの内に、隣人を高くあるべき者と見、高めるように愛しなさい」とパラフレイズすべきであろう。

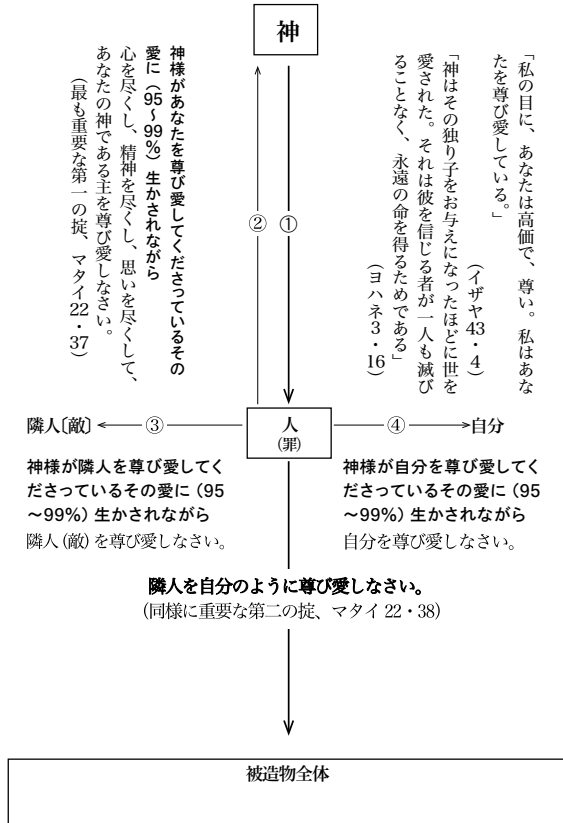
しかし、こうパラフレイズして、もう十分明らかになったと言えるのか。高くあることを目指すとして、その

高さとはどういう高さか。「アガペー」という霊的な愛が目指すことであるから、「位格」、即ち身分や地位などの高さでなく、「品位」の高さであることは言うまでもないとしても、その品位の高さとはどういうものか。例えば、謙虚さの内に芸術性の高みを目指し、それを互いに高め合う輪を形成することはアガペーの第二の掟が求められることか。

ここで、筆者はニーグレンの中にあった一つの重要な前提に触れ、それはそのまま受容しなければならない。それは、人間の「アガペー」は神の「アガペー」から独立に存在するものではなく、前者は後者に生かされて成立するものであり、従って両者は本質を共有するという考えである。ニーグレンと筆者は、神の「アガペー」の本質の掟え方は相反しているが、しかし人間の「アガペー」が神の「アガペー」に生かされ、本質を共有して存在するとの考えは共にしなければならない。即ち、神の「アガペー」が人間を善へと導き愛す、言い換えれば「尊び愛す」、その愛に人間が生かされることによって初めて、人間の神への、また隣人への、そして自らへの「アガペー」も真にそれぞれに対する尊びの愛として存在し得るのである。神の尊びの愛に生かされると言っても、人間自身の努力がなしではあり得ないから、100%とは言えなくても、95%ないし99%神の「アガペー」に生かされながら、初めて人間の「アガペー」の働きもそれとして存在し得るのである。⁽⁹⁾①神から人への、②人から神への、③人から隣人（敵）への、④人から自己への、「アガペー」の関係を敢えて図示すれば左記のようになるであろう。神から人への「アガペー」は更に被造物全体に及ぶから、神↓人の矢を延長すれば、全体を十字架として捉えることができる。これはキリスト教における「アガペー」の構造の図である。そしてこの尊びの愛が全うされた形は、キリスト教が目指している「神の国」の

❖聖書における「アガペー」(尊びの愛)の構造

矢印は尊びの愛(アガペー)を表している。



- ❖ I 神はただの「人」をではなく、誰一人罪を免れない「人」を尊び愛して下さる。
- ❖ II ①なしの②③④は、聖書が説く「アガペー」ではない。①が先ずあり、①に生かされて②③④があるとき、②③④は「アガペー」である。

構造図であろう。

さて、これを踏まえて芸術性の高さの問題に戻れば、答は以下のものであろう。その人の目指す芸術の道が、神からの自身への「尊びの愛」に95%生かされる中で、必然性を持って示されるのであれば、それはイエスの教えに叶う「隣人と自己への尊びの愛」の一つの働きであらう。そして、その時、芸術性は神の国の到来に貢献するものとされているであらう。

三、「敵を愛す」から「敵を尊び愛す」へ

こうしてアガペー論——アガペーとは如何なる愛かを巡る議論——は『《尊びの愛》としてのアガペー』論として一層揺るぎなく確立されたと見て良いと思われるのであるが、まだ一つの問題がある。

人間が実践を求められる尊びの愛の中で最も困難なものは、言うまでもなく、「敵」に対するそれである。一体敵を尊び愛すということは実際に可能なのか。もし実現が不可能であるならば、「神の国」は『絵に描いた餅』、イエスの教えそのものが空しくならないか。

筆者の中で、この問題は至難であり続けて来た。実現不可能な単なる理念であつたとしても、それは最後まで究極の目標として人類の行動を導く「星」の役割を担うのではないかと考えられる一方で、自らはそれを遙かに仰ぎ見るのみであることに忸怩たるものがあり続けた。

しかし、実を言えば、幸運と言うべきか、筆者はこれまで「敵」と呼べる人に出会つたことがなかった。或い

は実際にはあったのかも知れない。その人が筆者に敵意を露わにしなかっただけなのかも知れない。しかし、ともかく、はっきりと正面から敵対する人間関係に立ったことはなかったのである。立ったことはなくても、想像の中で、そういう場合にイエスの教えを実践することは自分には到底不可能と予想されるのであった。そしてそうである限り、アガペーの理想的な姿を説くことに後ろめたいものを感じずにはいられないのも事実なのであった。しかし図らずも、本年の春から夏にかけての四ヶ月程、筆者は初めて正面から筆者を攻撃してくる「敵」に出会うことになり、苦闘、苦悶することとなった。その時、筆者の前方、上空に、高々と浮かび上がった言葉が「あなたの敵を尊び愛しなさい」であった。「あなたの敵を愛しなさい」ではなく、「あなたの敵を尊び愛しなさい」であった。自身のアガペー研究が既に礎石として敷かれていたのである。この掟、言い換えれば「法則」に実際に従えるかどうか、筆者は並々ならぬ「責任」と「命運」を感じた。「責任」とは、これまであれほど高々とアガペーの意義を称揚しつつ説き明かして来たことを、他ならぬその本人が「裏切る」のかという責めの問いであり、「命運」とはもしそうであるなら、筆者は、「偽善者」として、今後聖書の研究や学び合いの場から身を引かなければならないのではないかという、未来の道筋であった。

しかし、事実は以下の通りに進化した。これを筆者は自身の行動の記録としてではなく、「証し」として、即ち「アガペー自身の証し」として、記し、筆者に与えられた責任に応える。一切は終始「アガペー」が100%？筆者を動かして起こったことだからである。

私にとって「敵」となった人が誰であったかという非本質的な問題の方に読み手の関心が向かうことのないよ

うに、「敵対」の内容に関しては、できるだけ簡潔に記したい。これまで親しくして来た友人が突然筆者の著書の聖書解釈に関して「なっていない」と言い出して来たのである。一例を挙げれば、マタイ5・22「しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる」について、筆者がイエスはここで「尊びの愛」を説いていると述べたことに対して、なぜそう言えるのかと畳みかけて質問して来た。正当な批判は筆者自身が望み、待っているところであるが、当人自身が「著書というものは初めと中程と終わりを読めばおおよそ分かる」と言うて来たとおり、攻撃は、筆者から見ても、きちんと読んだ上でのものとは到底受け止められない、乱暴なものであり、しばしば心理的動揺を図る陰湿なものと感じられた。初めはそれは丁寧に彼の言葉に逐一答えることに努めたのであるが、きちんと答えたはずのところで、賛も否もないまま、問題を別のものにはぐらかされるという次第で、筆者は突如別の人格に、二重人格に、出会い、執拗に続く攻撃に心身の消耗を来たし、精根尽き果てたのであった。以前、泥酔の中ではあるが、彼が二人の友人を一方的に畳みかける独断の言葉で斬りつけ、追放した情景が甦り、恐怖にも襲われた。

通常なら瞬く間に絶交に到ったに違いないところを、そうはならなかったのは、私の中に既に「あなたの敵を尊び愛しなさい」——「あなたの敵を愛しなさい」ではない——とのイエスの言葉が不動のものとして立っていたからである。

「あなたの敵を愛しなさい」は「あなたの敵を喜ばしく感じて愛しなさい」とか、「あなたの敵を優しい思いで

愛しなさい」という意味に受け止めかねず、そうならば実行不可能であり、イエスも実行したか分らないと思えるが、「あなたの敵を尊び愛しなさい」である場合には、実行の易しさ・難しさという問題以前に、これは誰もが絶対に守らなければならない無条件の絶対的命令であるということを得心していたから、筆者は何の疑問も迷いも無しに、「どうこれを実行すべきか」という問題に直行したのであった。なぜ絶対的命令かを筆者は既に考え済みであった。「私のことを尊重しなくてよい、バカにしてよい」と真面目に考える人間は一人もいないはずで、誰もが「私を然るべく尊び愛してほしい」と考えているのであるから、これを踏まえて普遍的な公正な命令を立てるならば、「すべての人が互いを尊び愛し合わなければならない」という命令が、真の平和に到るために必要不可欠の、確固不動の、最も基本的な、無条件に正しい命令として確立されるはずである。聖書の中の「あなたの隣人を自分のように尊び愛しなさい」という命令形の法則はこれを更に一步推し進めたものだと言えるであろう。「すべての人が互いを尊び愛し合わなければならない」（これを①とする）と「あなたの隣人を自分のように尊び愛しなさい」（これを②とする）との間には一つの違いがある。それは①には「自分を尊び愛しなさい」は含まれていないが、②には含まれていることである。①は言い換えれば、「すべての人が他の人を尊び愛しなさい」で、「自分自身を尊び愛しなさい」は含まれていない。もちろん、それは隠れた前提として言外に含まれているとは言えるかも知れないが。しかし言外にあることと、きちんと表だって命令されることとの違いは極めて大きいはずである。というのも「私は自分自身を尊重しななければならない」という明確な自覚を持っている人が今世の中にどれ程いるであらうか。しかし②は、その点はつきりと、「あなたは自分を尊重して愛しなさい。そしてそれと同様に、あなたの隣人を尊重して愛しなさい」と命じているのである。このとき、②を否定したり、

どうでもよいと言ったりする人はいないはずである。それはできないはずである。それでもできると言う人がいるなら、失礼だが、顔に唾を吹きかけさせてもらうことであろう。一方④は我が身に触れることなしに言われているので、どこ吹く風で受け流す人が少なくないのだと思われる。

「あなたの隣人を、自分を尊び愛すように、尊び愛しなさい。」——くりかえすが、この命令形の法則は、どんな人間も否定したり、いい加減に扱ったりすることができない、確固不動の絶対的法則としての命令である。筆者の中でこのことはもうはっきりと確立していたから、筆者には、これを果たして実行することができるか、という問題は起こらず、どうしたらこれを実行できるかということだけが問題だった。「どうしたらそれができるか、お教え下さい」と祈らずにはいられなかった。具体的にどうすることが彼を尊び愛すことになるのか、皆目見当が付かなかったからである。祈りつつ、暗中模索した。幾つかのことが直ぐに頭に浮かんだ。一つは彼（X氏と呼ぶことにする）の尊敬すべきところにひたすら目を向け、それは尊敬するということであった。すると、真っ直ぐに考え至ったことは、X氏の専門領域での学者としての力量であった。その点を私は否定してはならない。しかし答は、それは絶対でない、であった。それはこれまで筆者が十分に認めて来たことであり、それを尊び続ける気持ちにいささかのブレもなかった。

問題は彼の「人間性」の方であった。どうしても二重人格としか思えない彼に対して、どう関わったらよいのか、どう言葉を交わしたらよいのか？ どのような目で彼を見たらよいのか？ これまでと同じ、親しみの気持ちが表れた目で見られるか。これまでと同じように冗談を言い合えるか。

自信がなかった。その点は全くなかった。

二人はこの問題が起こる半年も前に、毎年の恒例に従って、他の仲間も含めた共同で或る学び合いを持つ企画を立てていた。それに出来るか……一番の問題は、その会で再会した瞬間の最初の目と目の出会いであった。筆者の最初の目が何のわだかまりもないものであれば、——これまでと変わらない親しみと暖かさに満ちた、屈託のないものであることができれば、そして彼もまた同じであれば、その後は問題なくスムーズに行くであろう。これまでの「和」の中に復帰して、その延長線上を進むことができるであろう。しかし最初の目の出会いが、かすかにでも心底の不信感と警戒心を感じさせるものであった場合には？……それなしに出会えるか？

自信は全くなかった。あれだけ苦しみ、疲労困憊しているのだから当然である。しかし筆者は行くこと以外の道を示されず、会場に向ったが、着く前に決心していたことがあった。それは会場にはいつもの通り先に着いて、宿泊の部屋を、従来通り、彼との相部屋にすることであった。議論を続けるということは考えられなかった。もう止めようというところに落ち着いていた。勿論きちんと会って噛み合った議論ができるなら、筆者は望むところであったが、しかし、正直、もううんざりしていた。議論のためにではないのに、相部屋にしたのは、あのイエスの命令に従おうとの一心からに他ならない。これを筆者は考えて「選んだ」のではなく、イエスが命令して来たのである——「あなたの敵を隣人として尊び愛しなさい。」筆者は有無なく従っただけであった。

部屋に入って、筆者はベッドにごろりとしながら必死に祈り続けた。「私がするのではなく、あなたが私を運んで下さい。あなたが私を全面的にご支配下さい。……」

と、その時、突然外でガタンというような機械的な、金属的な異常音がした。私は何だ?!と玄関へ直行した。とっ!何とそこにX氏が立っていた。私の口から思わず出た言葉は「Xさん!どうしたんですか?大丈夫です

か?!」であつた。おそらく何事が起きたか案じる真剣そのものの顔だつたであらう。「うん。だいじょうぶですよ。ちよつと外に出つ張つたものがあつて、車輪がぶつかったけど。」彼の顔も真顔であつた。そのとき、筆者の手が「よかつた!」と自然に伸び、彼の手を握つていた!これまで通りの彼と筆者があつた。柔らかな笑顔での。

ここには筆者の何の努力もなかつた。努力が入り込む余地はなかつた。すべては動かされて、⁽¹²⁾運ばれて、そうなつていた。――祈り、願つた通りに。彼が車に荷物を取りに戻つたとき、筆者は部屋に入り、胸に涙が流れる中、神に厚い、熱い、感謝を献げた。

その後、プログラムが始まつたが、二人の間に、従来と比べて、若干の変化がなくてはなかつた。そもそも玄関で握手したとき、彼の目が勝ち誇つたような、私を見下すような目だつたら、筆者はやはりダメだつたであらう。その後筆者はずつと傷を引きずつたであらう。意図的に事態を悪くするようなことは絶対にしなかつたと思うが、プログラム全体に生き生きと、楽しく参加することはできなかったであらう。しかし彼の目は反対であつた。握手しながら、彼はかすかに心配そうな表情で筆者の顔をのぞき込んだのである。筆者が傷ついていないか、彼にも心配だったのである。これを見たとき、筆者の身も心も氷の固さは一氣に解け、筆者は「大丈夫ですよ」ということを無言で告げる思いの目で彼を見つめたのであつた。文字通り一瞬きの間のことであるが、これがあつて、握手は本物のものとなつたのであつた。そしてそれはその後のプログラムの中でも自ずと現れた。例えば、筆者の発言を彼は「あの考えは重要だと思う」と言ってくれたが、これまで余りなかつたことであつた。明らかに、彼の態度は「ざまあ見ろ」ではなく、反対であつた。そんな具合で、プログラムは終始和やかに進行し、これま

で通り、最後には全員で固い握手を交わして会場を去ることとなったのである。その後、一月位経ってからであったが、彼は若いときに面識のあった筆者の家内の九十六歳の母を見舞いに訪ねて来てくれた。玄関で挨拶して直ぐに帰って行ったが、彼の愛情が胸に沁みた瞬間であった。最近の彼からのメールの言葉遣いには、以前にはなかった、筆者を氣遣う細やかな息づかいが感じられる。

X氏の「二重人格」がどうなったのか、その後も筆者には判然としない。ただ、人間は誰しも根は謎の深淵ではないか。そもそも筆者にはもうどうでもよいことである。揺らぐことなく定まっているのであるから。彼の中の宝を探せ。

その時から既に四ヶ月経つが、この出来事は筆者の生涯の中で最も大きな出来事の一つだったと言えると思う。このことの前後で、筆者は別の人間になった感じがする。もしこの通りになっていなかったとしたら、もし筆者が、惨めにも、出会った彼を必死に押さえ込んだ敵意の目で見つめ、そのために彼も同様に筆者を見つめたなら、そしてそのためにその後の同室での立ち居振る舞いも、プログラム内の共同研究も、ぎくしゃくしたものであったなら、そして別れ際に憎しみを露わにして別れていたとしたら……。想像するだけでも凍る寒さに震えるが、ともかく、もしそうになっていたら、筆者はもう立ち上がれなくなっていたであろう。筆者は聖書の素晴らしさを筆者なりに伝え、それを分かち合って頂こうとすることには耐えられず、静かに独りになることがせいぜいだったであろう。『《尊びの愛》』としてのアガペー」という、筆者が永遠の真理として立つのを仰ぎ見て来た聖書とキリスト教の聖十字架は、今はただ無内容の言葉と文字に化し、さっさと心のゴミ箱に葬り去られたであろう。聖

書の言葉は余りにも高い。人間には実行できない。……深い絶望感・虚無感に襲われ、筆者の心と顔は虚ろになったであろう。筆者に残された唯一の生き甲斐は、同じように弱いクリスチャンの傍に近づき、慰め合うことだけだったであろう。人間はみな弱いです。その弱い人間一人一人のためにこそイエス・キリストは十字架に架かって下さり、身代わりになって私たちの弱さをお詫びして下さったのです。イエス様にすべてを委ねましょう。……幾度も聞いて来たこの教理に身を投げ、筆者自身は、しかし、死んだであろう。⁽¹³⁾

しかし実際の筆者はこれとは全く違ったのであった。「あなたの敵を尊び愛しなさい。」——この教えを神は、イエス・キリストは、100%——そう言いたい——筆者を「運んで」下さって、筆者の上に実現して下さったのである。この言葉は単なる「実現不能の高い理想」ではなかった。筆者はX氏を尊び愛することへ導かれただけではない。筆者はX氏を、X氏は筆者を、互いに尊び愛することへ導かれたのである。それはX氏も自他を尊び愛することを目指していたからではないか。——言葉の上では「尊びの愛としてのアガペー」をこき下ろしていたとしても。それは誰もが、気づいているかどうかは別として、求めているはずなのである。それだけではない。神とイエス・キリストは筆者がX氏と互いに尊び愛すことを実現して下さっただけでなく、また筆者が自分自身を尊び愛すことをも実現して下さったのである。(X氏にも同様であったことを筆者は期待するが。)筆者はこれを実現できなかったとき「死んだ」に違いないのとは正反対に、今ほど自分が「生きている」ことを感じることはない。筆者は神とイエスに今「尊い」者とされて生かされながら立っている。

筆者は、読者がこれを筆者が自慢話をしていると受け取られることはないと信じている。筆者は神が、イエスが、筆者の上にどれ程大きな御業を成し遂げて下さったか、その「証し」に努めている。「あなたの隣人を——

敵をも含めて——自分を尊び愛すように尊び愛しなさい。」——この言葉は実現不可能な空疎な言葉ではなく、すべての一人一人に、それぞれに応じて、神とイエスが実際に成就しようとされている言葉である。——こう筆者は今叫ばずにはられない。

筆者に今回このことが起こったのは、繰り返しになるが、何よりも先ず、筆者が「あなたの敵を愛しなさい」と普通訳されているイエスの言葉を、そうではなく、「あなたの敵を尊び愛しなさい」と受け止めたからである。初めから、自分はXさんを尊び愛せるか、どうすれば尊び愛せるか、を追求したからである。「ガタン」の機械音はそのことの上で起こった。聖書の言葉の意味を正確に捉えるということほど重要なことはない。キリスト教が不滅の価値を持つ宗教であるかどうかは、一つには、このことにかかっているであろう。「アガペー」が「尊びの愛」であるかどうかはそのことに直結しているから、抜き差しならなく重要である。しかし筆者の上に「敵を尊び愛す」ことが、恵まれた一つの小さな形においてであれ、現に実現した⁽¹⁴⁾ことによって、その正しさが立証されたのである。聖書の言葉が真理であることが今あらためて確証されたのである。その喜びが筆者の心身全体を揺るがす。そしてそのことをぜひ一人残らずのキリスト者に分かち合って頂きたいと願っている。

註

- (1) 「アガペー研究序説(一)」、「同(二)」、「同(三)」、『宗教と文化』22、23、24、二〇〇三〜六年、「ニーグレン『アガペーとエロース』再批判」(『宗教と文化』33、二〇一七年)

(2) 『尊びの愛』としてのアガペー (教文館、二〇一五年)

(3) B.B. Warfield, *The Terminology of Love in the New Testament*, *The Princeton Theological Review*, January & April, 1918

(4) 「愛す」とは言えなくとも、「尊んでいる」とは言え、そうであれば、「尊び愛している」とも言えるのではないか。

(5) 「ニーグレン『アガペーとエロース』再批判」(『宗教と文化』33) 三〇頁以下参照

(6) 「愛している」は原典のヘブライ語では「アーハブ」(אהב)であるが、それが『セプチュアギンタ』では「アガパオー」(agapao)と訳されている。このことは重要だと思われる。「アーハブ」は広く一般的に「愛す」こと全般を言い表す語であったとしても、イザヤ書のこの箇所では読者にとって「尊び愛す」の意味合いを強く帯びていたであろう。そこへギリシア語で「アガパオー」が当てがわれたのは、「アガパオー」には元々「尊び愛す」のニュアンスがあつて、しつくり来たからなのか。それとも、ウオーフィールドの言うように、元々は「尊び愛す」の意味合いだった「アガパオー」が、『セプチュアギンタ』の時代には単なる広く「愛す」の意味になつていて、「アーハブ」に近いから、機械的にあてがわれたのか。どちらかは分からない。イエス自身はアラム語を用い、ギリシア語は用いなかつたであろうから、細部の事情は一層分からないが、ただ、イザヤ書のこの言葉を重要な言葉として心に銘記していたとすれば、神の愛を、人間を「尊び愛す」愛として受け止めていたことは間違いないはずである。イエスの言動が実質的に尊びの愛に貫かれていたことを見れば、福音書の記者が「フィレオー」と区別して「アガパオー」を用いているとき、「アガパオー」は「尊び愛す」の意味合いを持つていたことは確かだと思われる。そもそもユダヤ教の伝統そのものが、イザヤのこの言葉を、また二つの「アハバ」の掟を聖書の中に持っていたとき、神↑人、人↑隣人、人↓自己の愛を「尊びの愛」として受け止める自然な傾きを持っていたのではないか。イエスもその伝統の中に育ち、それを受け止め、引き継ぎ、更に高め、深めたのではないか。

(7) 「アガペー」が「尊びの愛」だと主張しているとき、アガペーが「尊び」であつて、「愛」ではないと主張しているわけでは全くないことに十分留意されたい。ルカ6・27く35には敵を尊び愛す具体的な行為が列挙されているが、それは一言で要約すれば、敵に「よくする」・「親切にする」・「情け深くする」(ποῦν καλῶς

(8) ἀγαποῦν(αι) ことであり、これらはまさに「愛」の様相と言うべきである。しかし敵にこれらの行為を行うことは相手を尊ぶことからこそ生まれるのであり、またそうである限りで推奨されているのであって、まさに尊びの愛としてのアガペーの様相なのである。

言うまでもなく、この「自分を低くする」は自分の品位を下げるということではなく、「謙遜である」の意味の慣用句である。

(9) 「自己への尊びの愛」という言葉は過度な自尊、「尊大」につながるのではないかという疑問を生むかも知れないが、それは「神が自分を尊び愛して下さることに95%生かされながら」という不可欠の条件を欠く場合である。聖書における「自己へのアガペー(尊びの愛)」はいわゆる「自尊心」ではない。

(10) 二〇一七年

(11) 「第二の愛の掟」は「律法」(νόμος)の中で最も重要な一つだと言われているが、この νόμος を神が定められた秩序と受け止めて、その意味合いを強く表せば、「法則」と訳すこともできるであろう。命令形の法則である。

(12) 私たちが神を尊び愛し、隣人と自分自身を尊び愛すことは、自分の力でそうすることを目指すのではなく、神が私たちを尊び愛してくださるその愛に95%生かされながら、私たちは5%の努力でやっと実現できるのだ、と筆者が述べてきたことが、文字通り、実現したのである。敵を尊び愛すことは99%生かされることによってのみ実現されることだ、とはっきり思われる。

(13) ニーチェの弱者・キリスト者の慰め合いへの批判は一部当たっているであろう。但し、彼自身がそれに代わる正しい道を見出し、進んだとは到底思えないが。

(14) 勿論、「敵」と言っても、X氏は良識ある学者であり、極めて質のよい敵だったことは間違いない。心が痛むことであるが、世の中には良心のかけらもないのではないかと思わせる極悪非道を働く人間が何と多く存在することであろう。筆者自身が何の正当な理由もないのに家族を殺められたときに、その敵をも尊び愛すことができるかと自問すれば、「否」の拒絶反応が直ちに起こる。およそ「尊ぶ」ことに全く無縁な人間を尊び愛すなどということ程無駄な、空しい、ことがあるか。……そういう暴虐を受けた方にかけることができる言葉は筆者にはない。筆者がその方にできる唯一のことは、その方の隣にそっと立ち、ただ慰めることだけであろう。

暴虐の敵を尊び愛せる程人間は強くない。そこまで強くない人間一人一人のためにこそイエスは十字架に架かってくださり、その私たちの弱さを、身代わりになって父である神にお託びしてくださったのです。主・イエスにすべてを委ねましょう。……この教理に一緒に身を投げ、筆者はその方と一緒に死ぬであらう。

ただ、にもかかわらず、筆者はなおその方と共にやはり「生きる」ことを目指し、探ることも求められるのではないかと思う。なぜなら、その方が「尊さ」を失って、その意味で「死ぬ」ことは一層事態を深刻にすることだと思えるからである。どうしたら、その方が尊さを失うのでなく、むしろ高められることができるか。

極度に難しい問題であるが、一つは、その敵に報復せずに、永遠の裁きにすべてを委ねることは既に当の敵に対する（そして神に対する、また自分自身に対する）尊びの愛であることを告げ、またご家族の犠牲が尊く生かされる道——ほんの一例だが、同じ犠牲がくり返されないために活動する働きや組織の確立——をご一緒に目指すことなどが、かろうじて考えられないか。